

④ 櫻井和子氏（択捉島元島民）



今日は皆さんと北方領土についてお話ししたいと思いますが、まず、北方領土の位置としては、北海道本島の東北部に浮かぶ択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の島々からなっています。歯舞群島の貝殻島と根室の納沙布岬までの距離は 3.7 km しかありません。

北方領土は日本人の祖先が築き上げた島なのです。歴史的に見ても、江戸時代に正保御国絵図（しょうほうくにえず）という地図ができていますので、そのときも既に択捉、国後という名前が載っておりますし、江戸幕府は北方警備のために、択捉島の岬に「大日本恵登呂府」という標柱を建て、日本の領土であるということを示しております。

1855年に日本とロシアは日魯通好条約を結び、択捉島より南は日本領土、ウルップ島から北はロシア領土と、はっきり決められておりました。

それが、1941年、日本が世界中と戦争を始めてしまいました。初めのうちは強くて、いろんな国を占領したりして、みんなが喜んでいたのですが、徐々に戦況は悪化、アメリカは広島と長崎に原子爆弾を投下しました。これは致命的なことであり、これ以上戦争を続けたら、日本人はみんな死んでしまうということで、無条件降伏、日本は戦争に負けてしまいました。それと同時に、ソ連は有効であった日ソ中立条約を一方向的に破棄し、北方領土とサハリンを占領しました。日本が戦争に負けた 1945年8月、わずか終戦の日の6日前にソ連が日本に対し、宣戦布告してきたのです。日本は原子爆弾を落とされ、勝ち目がないだろうとのことで、ソ連は宣戦布告してきたのでしょ。そのために北方領土が全部、占領されてしまいました。

私は択捉島で生まれましたが、小学校5年生のときに択捉島を後にして、函館に来ました。終戦時の恐ろしさは、引き揚げてきた家族から話を聴きました。日本はアメリカに戦争で負けたのだから、アメリカが侵攻してきたものと思っただけなんです。ところが、空に向かって威嚇射撃をしながらソ連の兵隊が択捉島に入ってきたそうです。私の家は郵便局や駅通をしていましたので、一番先に目をつけられ、郵便局の通信施設を破壊されたり、土足のまま旅館に上がって、家族は全員、家の前の物置小屋に押し込められたそうです。

私の祖父は、明治28年に北方警備隊ということで択捉島に渡りました。それから50年あまり、厳しい環境の中で、一生懸命開拓をして築いたそれなりの財産も資産も、全部そこでソ連に

取られてしまいました。交通機関というのは、すべて馬でしたが、50 頭ほどいた馬も全部、ソ連に取られてしまいました。

ソ連の軍人の家族などが村の人たちの家にそれぞれ住み、日本の着物を欲しがったようです。着物と食料を物々交換し、飢えをしのぎ、2年近く頑張ってきたそうです。日本の軍隊も島に入っておりましたが、終戦後、武装解除されて、このままどこかに連れ去られると思ったのでしょうか、手紙や写真を私の両親に託したそうです。兵隊は全員、シベリアに連れて行かれたそうです。私の母は、預かった大事な手紙や写真を、魔法瓶のガラスの空間に入れて持ってきました。

引き揚げてくるときも、ソ連軍が、突然船に乗れと言ったそうです。みんなは、着のみ着のみまで、どこへ連れて行かれるかわからないまま、船に乗せられて樺太を経由して函館にきました。リュックサック一つで引き揚げてくるとき、祖父はどんなにか残念だったかと思います。

私は小学校5年生のときに島を後にしたので、5年ぶりに家族に会うことができました。そのうれしさは、二度とないと思います。



次に、択捉島での思い出をお話しします。

その頃の小学校の思い出と言うと、1クラスしかなくて全校生徒が44人だったと思いますが、列で学年を分けていて右が1年生、真ん中が2年生、左が3年生、先生は校長先生が用務員さんを兼務しており、1人しかいません。1日に1時間しか授業を受けられませんでした。あとは全部自習です。そのとき、なんとか大きい都市に出て、先生になる資格を取り、また島に帰ってきて、先生のお手伝いをしようと心掛け、島から出てきたのですが、叶えられませんでした。

隣村で運動会があると応援に行きました。4年生以上ですから、15人くらいだったでしょうか。お弁当を持って、リュックサックを背負って14キロの道のりを往復歩くのです。途中、クマが出るので、父兄の人たちが馬に乗って、熊よけのラッパを吹いて私たちを守ってくれました。

小学校の周りは松林で、その松の実実は10cm以上もあり、大きいのです。その中に、お米の2倍くらいある白い実があるので、みんな休み時間にはそれを採って、おやつ代わりにしていました。おいしかったです。

海は寒流のため泳げないので、沼や川で泳ぎました。また、釣りもしました。釣りは木でできた栈橋で30cmもあるアブラコも釣り上げました。

また、1年に2、3回、映画がきました。必ず学校で上映され、それを見に行きました。その

夜の帰り道、択捉島の月は特別美しいものでした。星もきれいでした。空気が澄んでいるからなのでしょう。千鳥が飛び交う様も月光に映えて、すごくきれいだったことを覚えています。

クジラも捕れましたから捕鯨場もありました。捕鯨船がクジラを捕ってくると、長い汽笛を3回ずつ鳴らして港に入ってきます。村の人達は一齐に港に走って行ってクジラの陸揚げを見に行きました。大きなクジラが引き揚げられてくると、クジラの解体をする人は、薙刀のように長い柄の先に50センチくらいの大きな刃をつけて解体を始めるのです。見に行っている人に「これ持って行って食べれ」と言って20cm四方くらいの大きさの肉をみんなにくれました。

捕鯨場のほかに、缶詰工場、サケ・マスの孵化場などの施設がありましたから、函館、青森、秋田などからたくさんのお客さんが来て、村の人口が何倍にも増えたときがありました。

北方領土には、トド、オットセイ、アザラシ、ラッコ、キタキツネ、エゾテンなどたくさんの動物がすんでおり、エトピリカなど珍しい鳥もいました。

海も寒流と暖流がぶつかっているところなので、世界の三大漁場の一つと言われており、サケ、マスはもちろんのこと、タラバガニ、花咲ガニ、ウニ、ホタテ、昆布とか海苔などたくさんの資源に恵まれておりました。子供心にも、ここでは一生、食べていけるものと思っていました。

第二次世界大戦が始まる1か月くらい前ですが、朝起きると5隻、6隻と港に入ってくるのです。単冠湾（ひとかっぱわん）という湾は深かったのでしょうか、ついには40隻くらいの船でいっぱいになりました。軍艦では、昔の日本の海兵がセーラー服を着て、帽子のリボンを風になびかせながら、手旗信号で交信をしておりました。

夜には、数隻の軍艦から、サーチライトで空に向かって幾筋もの閃光が放たれており、ランプでの生活をしていましたものですから、びっくりして空を眺めておりました。

島の人たちは、電気、ガス、水道など全くありませんでしたが、不自由さなど感じないで、みんな仲良く平和に暮らしておりました。

日本の歴代の首相がロシアを訪れ、会談をしていますが、いまだに北方領土問題は解決に至っておりません。ロシアからもゴルバチョフやエリツィン、プーチン大統領が日本を訪れ、そのたびにいろんな会談をされていますが、いまだに解決の道はついておりません。

元島民の人たちはお墓をそのまま置いてきておられます。墓参のためにいろいろな地方に出向くことができるようになりました。私も弟を3歳で亡くしているので、平成4年の北方領土墓参で島を訪ねました。しかし墓石は一つもありませんでした。後で聞いたところ、ロシアの人たちが墓石を土台や、パンの焼き窯にしたそうです。

慰霊祭の後、帰るときに小さな茶色の犬が、1軒も家がないのにバスの横を鳴きながら走ってきました。私の妹も参加していましたが、あの子犬は弟だったのかなと二人で思いました。連れて帰りたかったです。

政府としては、今、北方領土に住んでいる島民たちとの交流を深めることによって、返還要求運動も少しは良い方向に向かうのではないかと、ビザなし交流などの機会をつくってくれています。

戦後67年も経ってしまい、当時1万7千人いた人たちも、1万人の人が亡くなってしまいました。これからの北方領土返還要求運動には、皆さんのような若い人たちの力で推し進めていかなければなりません。残っている島民も、既に平均年齢が78歳を超えてしまいました。これからは、皆さんと力を合わせて領土問題に取り組んでまいりたいと思います。

日本とロシアの関係が、これでわかっていただけたと思います。

<訪問校>

- 福島町立吉岡小学校（平成24年11月8日（木））



・八雲町立泊川小学校（平成25年1月28日（月））

